

第19回東日本事例発表研修会 事例概要集



開催日	2019年11月12日（火）
会場	一橋大学 一橋講堂 （東京都千代田区一ツ橋2-1-2 学術総合センター内）
主催 運営	公益社団法人全国有料老人ホーム協会 東日本事例発表研修会実行委員会
後援	厚生労働省 東京都 埼玉県 千葉県 神奈川県 一般社団法人全国介護付きホーム協会 一般社団法人高齢者住宅協会

目 次

当日プログラム	1. 2
参加者へのお願い	3
会場レイアウト図	4

第 一 会 場

会場・発表No.	発表タイトル	ホーム名	頁番号
(1-1)	ココナッツオイルを用いた認知症ケア 第 7 報 ～心の豊かさに繋がった 著効例 3 例～	エバーグリーンシティ・寺岡	5
(1-2)	認知症サポートチームの活動 ～多職種協働による認知症ケアを目指して～	コンフォートガーデンあざみ野	6
(1-3)	サン・ラポール調布における業務改善の取り組み ～働きやすい現場を目指して～	サン・ラポール調布	7
(1-4)	介護施設におけるコンプライアンス普及活動の成果とその課題 ～施設内における勉強会と実態調査を例に～	らぽーる上尾	8
(1-5)	機能訓練の取り組みと効果 ～より良い QOL の為に～	アメニティーライフ八王子	9
(1-6)	入居者満足度向上の取り組み ～施設におけるケアマネジャーの役割～	あすみが丘グリーンヒルズ	10
(1-7)	チャレンジ ～自分らしく生きる～	マザアス南柏	11
(1-8)	骨折り損はさせません！ ～骨密度を増やしてより健康に～	湯河原〈ゆうゆうの里〉	12
(1-9)	突然訪れた介入拒否の入居者との関わりの記録 ～介入困難であった一般入居者が介護保険の利用を始めるその時～	サン・ラポール南房総	13
(1-10)	自立支援プロジェクト	エスペランサ登戸	14
(1-11)	トイレで快便、快・生活 ～薬剤に頼らない排便コントロールをめざして～	ネオ・サミット茅ヶ崎ケアレジデンス	15
(1-12)	エンド・オブ・ライフの過ごし方 ～介護施設はいかがでしょうか？～	そんぽの家 はるひ野	16
(招待発表)	リハビリ介護士を目指して ～オールフィレンツェで挑む～	フィレンツェライフ青山	17

目 次

第 二 会 場

会場・発表No.	発表タイトル	ホーム名	頁番号
(2-1)	働き方改革 ～サービスの質を落とさない時間削減方法～	ライフ&シニアハウス川越南 七彩の街	18
(2-2)	ホーム内における働き方改革 ～働きやすい環境づくり～	シルバーシティむさしの樺館	19
(2-3)	〈ゆうゆうの里〉で最期を迎えたい ～看取り介護への取り組み～	佐倉〈ゆうゆうの里〉	20
(2-4)	『できない』から『どうすればできる』に意識を変えた業務改善 ～「多忙感調査」で問題の見える化～	介護付有料老人ホーム サンライフ寿	21
(2-5)	我が家は国立公園 ～安心があるから自然を楽しめる～	伊豆高原〈ゆうゆうの里〉	22
(2-6)	入院生活から一般居室に戻る時 ～自分らしさを再び掴むためのサポート～	ラビドール御宿	23
(2-7)	いつまでもご夫婦一緒に暮らして ～一般居室からケア棟へ～	ネオ・サミット湯河原	24
(2-8)	心の扉を開く鍵 ～それは・・・～	コンフォートロイヤルライフ多摩	25
(2-9)	介護居室から一般居室へ ～環境が変わったことによって～	東急ウエルナ大岡山	26
(2-10)	スムーズな入浴 ～ 時短・効率見直しを ～	センチュリーシティ西千葉	27
(2-11)	一日の計は睡眠にあり ～睡眠障害に向き合って～	アライブ浜田山	28
(2-12)	届け!私たちの想い、あなたへ ～入居者も職員も安心・安全な対応を行えるように～	佐倉〈ゆうゆうの里〉	29

ご協力いただいた企業のご紹介

第19回東日本事例発表研修会 プログラム案

(敬称略)

9:00	当日スタッフ集合(2階 第一会場前)			
9:30～	発表者・コーディネーター集合		集合写真撮影・オリエンテーション	
10:00 ～ 10:30	参加者受付			
10:30 ～ 11:00	開会式	開会の辞	中澤 俊勝	公益社団法人全国有料老人ホーム協会 理事長
		来賓挨拶	齋藤 良太	厚生労働省 老健局 高齢者支援課長
		来賓挨拶	植竹 則之	東京都 福祉保健局 高齢社会対策部 施設調整担当課長
		司 会	森村 泰之	(株)長谷エシニアホールディングス(東日本事例発表研修会幹事法人)

【第一会場】 (2階 一橋講堂)

	時間	発表番号	発表テーマ・発表者		コーディネーター
1	11:05 ～ 11:20	(1-1)	ココナッツオイルを用いた認知症ケア 第7報 ～心の豊かさに繋がった 著効例3例～	エバーグリーンシティ・寺岡 守・男澤	(一財)日本老人福祉財団
2	11:20 ～ 11:35	(1-2)	認知症サポートチームの活動 ～多職種協働による認知症ケアを目指して～	コンフォートガーデンあざみ野 深澤	
3	11:35 ～ 11:50	(1-3)	サン・ラポール調布における業務改善の取り組み ～働きやすい現場を目指して～	サン・ラポール調布 森・鎌倉・松本	
4	11:50 ～ 12:05	(1-4)	介護施設におけるコンプライアンス普及活動の成果とその課題 ～施設内における勉強会と実態調査を例に～	らぼーる上尾 森井	
12:05 ～ 12:15		質疑応答 10分			
12:15 ～ 13:15		昼食・休憩 60分			
5	13:15 ～ 13:30	(1-5)	機能訓練の取り組みと効果 ～より良いQOL の為に～	アメニティーライフ八王子 國廣・瀬戸	(株)サン・ラポール調布
6	13:30 ～ 13:45	(1-6)	入居者満足度向上の取り組み ～施設におけるケアマネジャーの役割～	あすみが丘グリーンヒルズ 芝崎	
7	13:45 ～ 14:00	(1-7)	チャレンジ ～自分らしく生きる～	マザアス南柏 齋藤・伊藤	
8	14:00 ～ 14:15	(1-8)	骨折り損はさせません！ ～骨密度を増やしてより健康に～	湯河原〈ゆうゆうの里〉 深沢	
14:15 ～ 14:25		質疑応答 10分			
14:25 ～ 14:35		休憩・移動 10分			
9	14:35 ～ 14:50	(1-9)	突然訪れた介入拒否の入居者との関わり方の記録 ～介入困難であった一般入居者が介護保険の利用を始めるその時～	サン・ラポール南房総 嶋野	(株)長谷エシニアホールディングス
10	14:50 ～ 15:05	(1-10)	自立支援プロジェクト	エスペランサ登戸 堀内	
11	15:05 ～ 15:20	(1-11)	トイレで快便、快・生活 ～薬剤に頼らない排便コントロールをめざして～	ネオ・サミット茅ヶ崎ケアレジデンス 菅原・小熊	
12	15:20 ～ 15:35	(1-12)	エンド・オブ・ライフの過ごし方 ～介護施設はいかがでしょうか？～	そんぽの家 はるひ野 朝比奈	
15:35 ～ 15:45		質疑応答 10分			
15:45 ～ 15:55		休憩・移動 10分			
招待	15:55 ～ 16:05	(招待発表)	リハビリ介護士を目指して ～オールフィレンツェで挑む～	フィレンツェライフ青山 林・村井・中村	(株)長谷エシニアホールディングス
	16:05 ～ 16:10	質疑応答 5分			
16:10 ～ 16:30		閉会式	閉会の辞・事務連絡	(司会)	
16:30 ～ 17:00		会場片づけ・移動			
17:00 ～ 19:00		懇親会(3階 食堂)			

【第二会場】 (2階 中会議場)

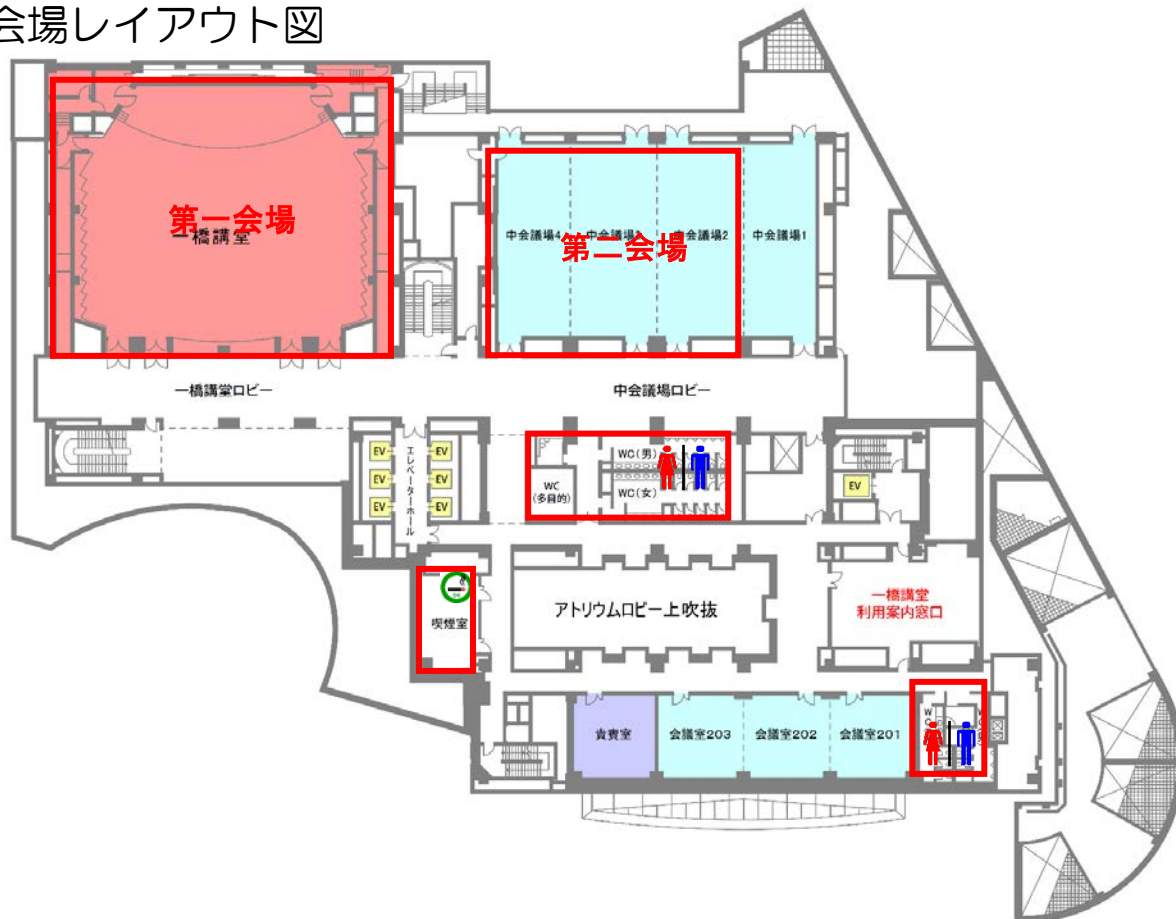
	時間	発表番号	発表テーマ・発表者	コーディネーター
1	11:05 ～ 11:20	(2-1)	働き方改革 ～サービスの質を落とさない時間削減方法～ ライフ&シニアハウス川越南 七彩の街 平野・郷右近	大和ハウス ライフサポート (株)
2	11:20 ～ 11:35	(2-2)	ホーム内における働き方改革 ～働きやすい職場づくり～ シルバークロニクルむさしの櫛館 江藤	
3	11:35 ～ 11:50	(2-3)	〈ゆうゆうの里〉で最期を迎えたい ～看取り介護への取り組み～ 佐倉〈ゆうゆうの里〉 塚本	
4	11:50 ～ 12:05	(2-4)	『できない』から『どうすればできる』に意識を変えた業務改善 ～「多忙感調査」で問題の見える化～ サンライフ寿 武田・海川・藤田・伊藤	
	12:05 ～ 12:15		質疑応答 10分	
	12:15 ～ 13:15		昼食・休憩 60分	
5	13:15 ～ 13:30	(2-5)	我が家は国立公園 ～安心があるから自然を楽しめる～ 伊豆高原〈ゆうゆうの里〉 藤原・野崎	(株)アライブ メディケア
6	13:30 ～ 13:45	(2-6)	入院生活から一般居室に戻る時 ～自分らしさを再び掴むためのサポート～ ラビドル御宿 式田	
7	13:45 ～ 14:00	(2-7)	いつまでもご夫婦一緒に暮らして ～一般居室からケア棟へ～ ネオ・サミット湯河原 露木・久澤	
8	14:00 ～ 14:15	(2-8)	心の扉を開く鍵 ～それは・・・～ コンフォートロイヤルライフ多摩 米田	
	14:15 ～ 14:25		質疑応答 10分	
	14:25 ～ 14:35		休憩・移動 10分	
9	14:35 ～ 14:50	(2-9)	介護居室から一般居室へ ～環境が変わったことによって～ 東急ウェリナ大岡山 西・片白・伊藤	(株)マザアス
10	14:50 ～ 15:05	(2-10)	スムーズな入浴 ～ 時短・効率見直しを ～ センチュリーシティ西千葉 渡部・佐藤・坂本	
11	15:05 ～ 15:20	(2-11)	一日の計は睡眠にあり ～睡眠障害に向き合って～ アライブ浜田山 和田・野澤	
12	15:20 ～ 15:35	(2-12)	届け!私たちの想い、あなたへ ～入居者も職員も安心・安全な対応を行えるように～ 佐倉〈ゆうゆうの里〉 宮地	
	15:35 ～ 15:45		質疑応答 10分	
	15:45 ～ 15:55		休憩・移動 10分	

第19回東日本事例発表研修会

ご参加者へのお願い

1. 建物内では、発表者・懇親会参加者は必ず「名札」を着用ください。
2. 第一会場は2F「一橋講堂」、第二会場は2F「中会議場（2～4）」です。
プログラムをご参照の上、聴講したいものをブロック単位でお選びください。
発表時間中の出入りはご遠慮ください。
3. 同一フロアで他団体の会合が開かれていますので、ロビーではお静かに願います。
4. 発表時間中の研修会場内での飲食はお控えください。
5. 会場内での携帯電話の使用はご遠慮ください。
あらかじめ電源を切るか、マナーモードとしてください。
6. 昼食休憩は12：15～13：15です。
7. 昼食を会場内で召し上がる場合は、第二会場（2F中会議場）をご利用ください。
第一会場（一橋講堂）内は飲食禁止、ロビー等の共用部は食事禁止（飲み物のみ可）です。
※飲み物の自動販売機は2Fにあります。
8. 昼食休憩時間に館外に出る場合は、13：15までに会場にお戻りください。
9. 持ち込み物のゴミ（食べ殻・ペットボトル等）はお持ち帰りください。
10. 館内は、2Fの喫煙室を除き、全館禁煙です。
11. アンケートのご協力をお願いいたします。
ご記入いただき、退場される際は、会場前に設置の回収箱にお入れください。
12. 懇親会会場は3F食堂です。
懇親会への参加は当日受付も可能です。受付にて承ります。（参加費 4,500 円／人）
13. 災害発生時には館内放送に従ってください。
14. 会場内には幹事法人の職員の方に会場スタッフとしてご協力いただいています。
会場でご不明の点がございましたら、「案内係」「会場係」の腕章を着けた各会場スタッフに、遠慮なくお声を掛けてください。

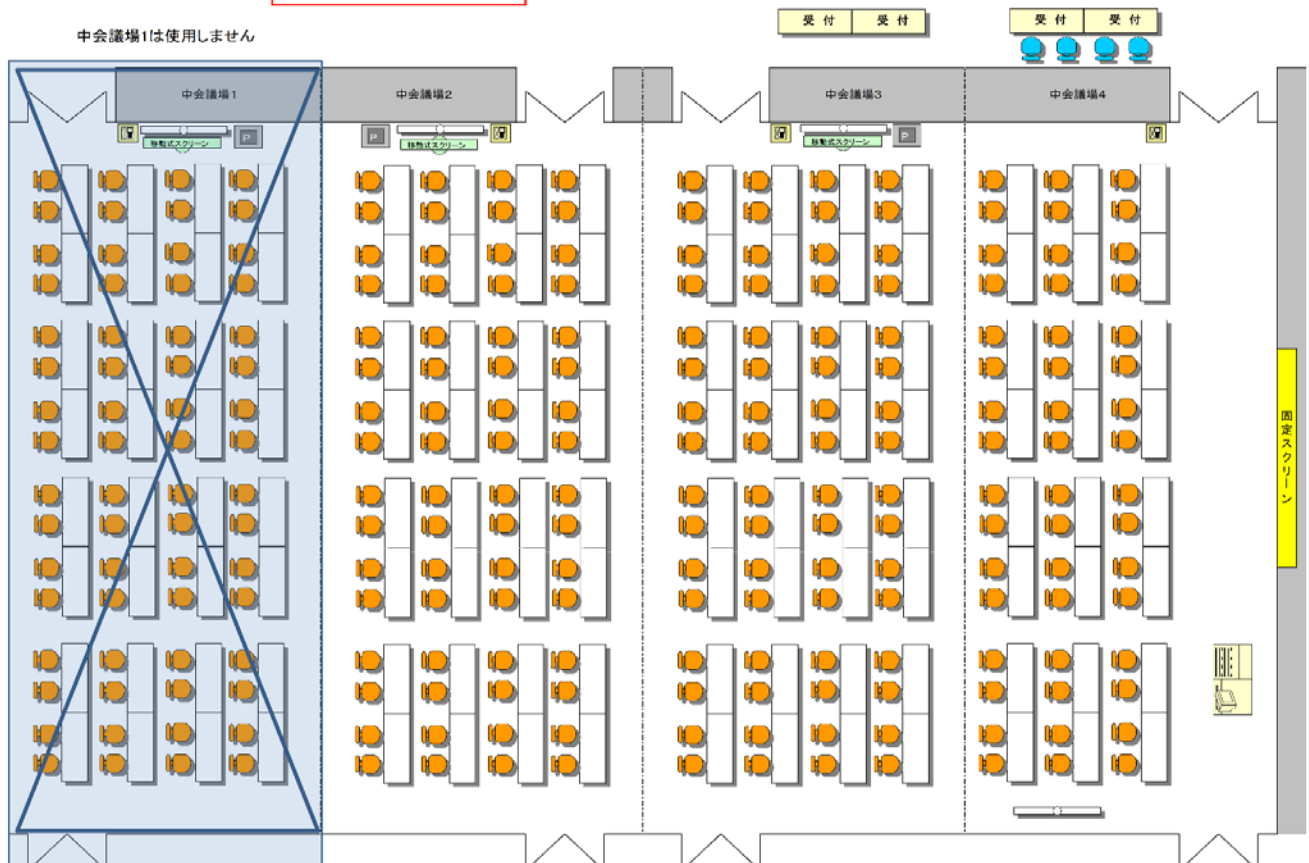
会場レイアウト図



第二会場・基本レイアウト

中会議場1～3 各64席 (長机:32台)
中会議場4 48席 (長机:24台)

中会議場1は使用しません



ココナッツオイルを用いた認知症ケア 第 7 報

～心の豊かさに繋がった 著効例 3 例～

エバーグリーンシティ・寺岡
介護職員 守佳恵・男澤しの

1 ホーム概要 (2019 年 7 月 1 日現在)

- ・ 類 型 : 住宅型有料老人ホーム・介護付有料老人ホーム
- ・ 開 設 日 : 2007 年 3 月 6 日
- ・ 居 室 数 : 214 室 (住宅型 142 室・介護付 72 室)
- ・ 入 居 者 数 : 224 人 (男性 71 人・女性 153 人)
- ・ 平 均 年 齢 : 85.6 歳 (男性 84.7 歳・女性 86.0 歳)
- ・ 要介護者数等 : 124 人 (要支援 41 人・要介護 83 人、平均要介護度 1.2)
- ・ 職 員 数 : 総数 109 人 うち直接処遇職員(常勤換算) 介護 28 人・看護 10 人

2 事例紹介

【はじめに】

当ホームでは、認知症ケアの一環として平成 25 年からココナッツオイルを用いた認知症諸症状改善へ向けた取り組みを継続しており、その効果や良い変化を記録し、報告してきた。今回はココナッツオイルの摂取の効果によりどのような生活の変化が現れ、楽しむことができているのか、また、気持ちの面でどのような変化が見られたかを考察することをテーマとし、第 7 報をして報告する。

【対象者】

認知症と診断を受け、ご家族様の協力が得られる方。
認知症の診断はないが、物忘れ等同様の症状があり、改善を望まれる方。

【活動内容】

- ・お食事の際にココナッツオイルを混ぜたコーヒー、お茶、味噌汁等を摂取。
- ・日々の認知面の変化に加え、週に 1 度、4 項目の筆記(①日付②名前③今日の気分④時計の図形描画)の実施、改長谷川式簡易知能評価スケール測定を行い、それらを独自の評価スケールを用いてどのような変化があるか観察。

【結果・考察】

- A 氏:ココナッツオイルを摂取し 4 年以上経過し 96 歳とご高齢であるも開始当初の長谷川式スケール 10 点台から 20 点に上がった状態を維持しておられる。また、入居当初より姪様と楽しんでいる仙台市街への外出も継続し楽しまれておられることから、ご高齢でのココナッツオイルの摂取開始でも効果が得られること、また、飲み続ける事で歳を重ねても楽しみを続けることができ、QOL の向上、心豊かに日々を送ることができる。
- B 氏:ココナッツオイルの摂取を開始しすぐに認知症状が改善し、合わせて便秘症状も改善することで生活のリズムが整ってこられた。その為ココナッツオイルを摂取する前の生活以上に楽しみの多い生活を送り B 氏の夢の実現にも繋がった。また、興味関心も増え生活の幅が広がった。
- C 氏:奥様を亡くされての喪失感とその影響から認知症状も見られてくる。ココナッツオイルを摂取し認知症状が改善した事と合わせスタッフとの関わりが増えたことで、スタッフがいる安心を感じて頂き、一時的に進んだ認知症状も改善し楽しみを継続することができている。

以上の事から、認知症になっても心の豊かさを感じて頂きながら生活を送って頂けると考える。
今後も取り組みを続け、認知症になっても心豊かな生活を送って頂けるよう支援していく。

認知症サポートチームの活動

～多職種協働による認知症ケアを目指して～

コンフォートガーデンあざみ野
老人看護専門看護師 深澤優子

1 ホーム概要 (2019 年 7 月 1 日現在)

- ・ 類 型 : 介護付有料老人ホーム(一般型特定施設入居者生活介護)
- ・ 開 設 日 : 2006 年 10 月 1 日
- ・ 居 室 数 : 126 室 (一般居室 105 室・介護居室 21 室)
- ・ 入 居 者 数 : 126 人 (男性 35 人・女性 91 人)
- ・ 平 均 年 齢 : 84.2 歳 (男性 84.1 歳・女性 85.1 歳)
- ・ 要介護者数等 : 44 人 (要支援 10 人・要介護 34 人 要介護度 1.9)
- ・ 職 員 数 : 総数 126 人 うち直接処遇職員(常勤換算) 介護 17.9 人・看護 9.9 人

2 事例紹介

【はじめに】

当施設では、「コンフォートエイジング」という理念のもと、認知症の居住者様ができる限り住み慣れた環境で自分らしく暮らし続けることができる施設を目指している。

昨年9月、認知症の容態の変化に応じた適時・適切な医療・介護をご提供する為に、多職種で構成された認知症サポートチーム(Dementia support team:DST)を発足した。物盗られ妄想により日常生活に支障をきたし、ケアの介入が困難であった居住者様に対するDSTの取り組みについて発表する。

【方法・内容】

○対象者:S様 女性 87 歳 ○病名:アルツハイマー型認知症 ○主訴:物盗られ妄想

2014 年、検査により軽度の認知症と診断されたが、「私は認知症でない」と通院を拒否された。その後 2017 年より、前日の事を忘れるなど物忘れの症状がみられるようになり、2019 年1月頃には、「廊下の花瓶が盗まれた」と物盗られ妄想がみられた。更に洋服や靴を段ボール箱に詰め、「自分の物が盗まれ、違う人の物が置いてあるから全部破棄してちょうだい」と興奮して訴えることが増え、周辺症状が悪化した。S様の症状悪化に伴い、老人看護専門看護師、看護師、ケアスタッフ、ケアマネジャー、理学療法士、作業療法士で構成されるDSTでは、S様の問題点を抽出し、活動を開始することとなった。

第一に、ケアスタッフはS様の周辺症状の対応に追われ、認知症の進行度に応じたケアの提供が難しい状態であった。DSTではS様の観察及び質問スケールによる客観的評価とS様の周辺症状のアセスメントを実施し、どのような介入が望ましいかを明確にすると共に、その結果をケア部門のカンファレンスにて報告、ケアの統一を図った。第二に、物忘れ外来など医療機関との連携が必要であった為、当施設で導入している在宅医療の医師に相談し、認知症専門医との連携を図ると共に、「認知症地域包括診療科」を算定し、包括的な支援により、24 時間のサポートが受けられる体制を整えた。第三に、S様の周辺症状を緩和していく為には、ケア部門以外の部署との連携が必要不可欠であった為、DSTでは、全部署で構成された居住者連絡会議にてS様の周辺症状の情報共有と対応の統一を図ると共に、DST主催による研修会を開催し、認知症の理解を深めた。

【結果・考察】

約 8 月間に亘り、DSTスタッフが中心となりS様の対応を行い、物忘れ外来も受診されたことで、現在では、物盗られ妄想は軽減し、引き続きケアのサポートを受けながら穏やかに生活されている。DSTによる定期的なアセスメント、ケア方針の提示、全部署による統一された対応により、S様の周辺症状は緩和することができたといえ、DSTの活動は、認知症居住者様に対し有用であると考察する。

当施設では居住者様の高齢化に伴い、認知症居住者様が更に増えてくることが予測される。S様の事例を通し、今後も多職種協働によるDSTの活動を積極的に行い、「コンフォートエイジング」を実現したい。

サン・ラポール調布における業務改善の取り組み

～働きやすい現場を目指して～

サン・ラポール調布
介護職員 森香織・鎌倉利充・松本智恵

1 ホーム概要 (2019 年 7 月 1 日現在)

- ・ 類 型 : 介護付有料老人ホーム(一般型特定施設入居者生活介護)
- ・ 開 設 日 : 1993 年 5 月 1 日
- ・ 居 室 数 : 104 室 (一般居室 99 室・介護居室 5 室)
- ・ 入 居 者 数 : 108 人 (男性 28 人・女性 80 人)
- ・ 平 均 年 齢 : 84.7 歳 (男性 85.0 歳・女性 84.4 歳)
- ・ 要介護者数等 : 33 人 (要支援 9 人・要介護 24 人、平均要介護度 2.18)
- ・ 職 員 数 : 総数 68 人 うち直接処遇職員(常勤換算) 介護 23.0 人・看護 7.3 人

元気な時から、重度な介護(認知症を含む)を必要とする状態になっても様々な生活介護サービスを提供し、入居者の皆様が安心して、快適な日々を送って頂けるよう運営に努める。高齢者の福祉増進に貢献するという高い理想と、事業者としての強い倫理観をもって、入居者の皆様の意思を尊重し、精神的に自立した豊かで自由な毎日を送っていただくことを運営の基本理念としている。

2 事例紹介

【はじめに】

サン・ラポール調布は、今年で設立 26 年を迎えた施設であり、現在に至るまで、介護職員の働く一日の業務スケジュール(タイムテーブル)は一律に決まっておらず、責任者が一日ごとにタイムテーブルを作成する流れになっていた。介護士不足の現在、タイムテーブルを作成するタイムロスや各職員の業務量の違い、業務の効率化を図る事が必要となっているため、大幅に改善する事とした。また、介護士一人一人の介護への知識・意欲の向上のため、各種研修を実施し、仕事に対する意識改革にも取り組んだ。

【方法・内容】

①聞き取り・調査

ミーティングで介護士との意見交換・アンケートの実施。

②必要人数の確認・業務の簡素化、研修の検討

一日に最低必要人数の把握・業務を効率的に組み込む。各種研修の実施。

③新しいタイムテーブル作成・実施

一日の流れを分かりやすくまとめたものを作成。

④振り返り・今後の課題

ミーティングを開催し、振り返りを行う。修正点、今後の課題をピックアップし、修正をする。

【結果・まとめ】

研修を通して、自分たちの求められている事、役割がより明確化された。また新しいタイムテーブルにより、個々が一日の流れを把握しやすくなった。タイムテーブルの縦軸(時間)と横軸(連携)を一人一人が意識しながら動き、より広い視野で仕事に取り組むことができるようになった。業務を円滑に行うだけでなく、時間にとらわれてはならない業務があり、それをどのように取り組んでいくか、という課題が見えてきた。

この結果を基に、更に一人一人が働きやすく、日々の業務の中でスキルアップしていけるようなシステム作りをしなければならないと再認識した。常にミーティングを繰り返しながら、その時々状況に応じた介護士主体であり、サン・ラポール調布独自の業務システムを作っていかなければならないと感じた。

介護施設におけるコンプライアンス普及活動の成果とその課題

～施設内における勉強会と実態調査を例に～

介護付有料老人ホーム らぽーる上尾
総務職員 森井貴良

1 ホーム概要 (2019 年 7 月 1 日現在)

- ・ 類 型 : 介護付有料老人ホーム(一般型特定施設入居者生活介護)
- ・ 開 設 日 : 2007 年 12 月 26 日
- ・ 居 室 数 : 119 室 (介護居室 119 室)
- ・ 入 居 者 数 : 109 人 (男性 41 人・女性 68 人)
- ・ 平 均 年 齢 : 87.0 歳 (男性 86.9 歳・女性 87.1 歳)
- ・ 要介護者数等 : 102 人 (要支援 15 人・要介護 87 人、平均要介護度 2.9)
- ・ 職 員 数 : 総数 89 人 うち直接処遇職員(常勤換算) 介護 38.8 人・看護 9.1 人

2 事例紹介

【はじめに】

介護業界に共通する課題として①利用者(顧客)に対する事故や事件(暴力など)②他業界に比べ高い離職率などがある。これらの課題は介護業界特有の課題でもある。これらの原因の一つとして介護業界におけるコンプライアンス普及の遅れやそれに対する意識の低さがあるのではないかと考え、コンプライアンス委員会を新設した。コンプライアンスの啓蒙活動や理解度テスト、勉強会、実態調査など様々な活動を約 2 年半にわたり行ってきた。社内全体にコンプライアンスを普及させ、その意識を向上させることがケアの質を維持・向上させ、働きやすい職場作りにつながるものと考えている。

【方法・内容】

- 期 間・・・2017 年 4 月～2019 年 9 月までの約 2 年 6 ヶ月
- 対 象 者・・・全職員(役職・職種・雇用形態に関わらず全職員を対象)
- 定 義・・・法令、社内規則だけでなく、倫理・マナー・接遇など「広義のコンプライアンス」の全て
- 主な活動・・・コンプライアンス違反投書箱の設置 2017 年 6 月
- 第 1 回コンプライアンス理解度テストの実施 2018 年 6 月
- 不合格者を対象とした勉強会を実施 2018 年 7 月
- 勉強会を経て再テストを実施 2018 年 9 月
- 第 2 回コンプライアンス理解度テストの実施 2018 年 11 月
- コンプライアンス実態調査アンケートの実施 2019 年 7 月

【結果】

最初の 1 年間は啓蒙活動により職員が「コンプライアンス」に接する機会作りを主とした。その啓蒙活動を受けて 2 年目は理解度テストを実施した。1 回目のテスト結果は不合格者が 30%を超え、勉強会や再テストを行うことで、2 回目のテストでは 96%が合格した。2 年間の活動により知識と意識の高まりを実感することができ、その間における投書も 2 件のみであった。3 年目となる 2019 年に社内の実態調査アンケートを行い、社内のコンプライアンス違反の有無を確認したところ軽微なものを含め 369 件の違反が回答された。

【考察】

- 知識・意識の高まりにより、細かなことにまで気づけるようになったことが 369 件の違反という結果を生んだ。
- 「投書に至らない軽微なものが多い」「その場で相手に直接注意することで足りている」「投書＝密告というイメージから投書を控える」などの理由により投書の数が少ない。

【まとめ】

様々な活動の結果、コンプライアンスに対する知識・意識が高まったことはテストの数字からも明らかであり実感できる。テストや勉強会だけでなく定期的な実態調査は不可欠であり、調査結果の公表後には職場の雰囲気が変わったとの声も聞くことを考えると、職場環境にも良い変化を与えている。今後は「投書＝職場環境を改善するもの」というイメージを根付かせ、事故防止、苦情処理、おもてなし委員会等の各委員会とも連携することでケアの質の向上、職場環境の改善(離職率低下)という結果に結び付けたい。

機能訓練の取り組みと効果

～より良いQOLの為に～

アメニティーライフ八王子
介護福祉士 國廣大貴・看護師 瀬戸愛

1 ホーム概要 (2019 年 7 月 1 日現在)

- ・ 類 型 : 介護付有料老人ホーム (一般型特定施設入居者生活介護)
- ・ 開 設 日 : 1995 年 4 月 1 日
- ・ 居 室 数 : 150 室 (一般居室 150 室・他 一時静養室 21 室・40 床)
- ・ 入 居 者 数 : 141 人 (男性 47 人・女性 94 人)
- ・ 平 均 年 齢 : 86.4 歳 (男性 85.2 歳・女性 87 歳)
- ・ 要介護者数等 : 57 人 (要支援 22 人・要介護 35 人)
- ・ 職 員 数 : 総数 41 人 うち直接処遇職員(常勤換算) 介護 24 人・看護 9.5 人

2 事例紹介

【はじめに】

ご入居者にとっての生活の質(QOL)とはなにかを考えてみました。今回、2 名(T様・K様)のご入居者が一般居室にて転倒、骨折し、ケアセンターにて一時静養する事となり「一般居室で暮らしたい」「下肢筋力の維持」という目標に向けた機能訓練の取り組みと効果を報告します。

【内容】

(対象者)	T 様	K 様
(介護度)	要支援2	要支援2
(性格)	几帳面・せっかち・心配性	真面目・頑張り屋
(既往歴)	末梢神経障害・右変形性膝関節症 左大腿部頸部骨折	心房細動・変形性膝関節症 左橈骨遠位端骨折

2 名のご入居者に対して当施設の機能訓練と、隣接する提携病院の理学療法士による、週1回の機能訓練と毎日の職員による歩行訓練を実施する中で、ご入居者の身体面、精神面がどのように変化していったのか記録をとりました。また、機能訓練を通してご入居者の思いを知り、個々に合った支援を提供しました。

【結果】

日々関わりをもち機能訓練を通して日常生活動作(ADL)が向上し、T様は自立歩行が出来るようになり、K様は一般居室に戻ることができました。2 名のご入居者が「もう一度一般居室で暮らしたい」という目標を持ちその人らしい生活を提供することで生活の質の向上がはかれたと考えます。

【まとめ】

今後各ご入居者に機能訓練を行う中で、ご入居者の生活の質を向上できるように日々ご入居者の声を聴き、ご入居者にとって「より良い生活」とはなにか施設全体で考えていきます。

入居者満足度向上の取り組み

～施設におけるケアマネジャーの役割～

あすみが丘グリーンヒルズ
介護支援専門員 芝崎容子

1 ホーム概要 (2019 年 7 月 1 日現在)

- ・ 類 型 : 介護付有料老人ホーム (一般型特定施設入居者生活介護)
- ・ 開 設 日 : 2007 年 9 月 1 日
- ・ 居 室 数 : 64 室 (介護居室 64 室)
- ・ 入 居 者 数 : 63 人 (男性 16 人・女性 47 人)
- ・ 平 均 年 齢 : 88.0 歳 (男性 87.0 歳・女性 88.4 歳)
- ・ 要介護者数等 : 57 人 (要支援 9 人・要介護 48 人、平均要介護度 2.5)
- ・ 職 員 数 : 総数 46 人 うち直接処遇職員(常勤換算) 介護 27.7 人・看護 5.3 人

2 事例紹介

【はじめに】

当ホームにはケアマネジャーと生活相談員がそれぞれ一人ずつ勤務していますが、開設 13 年目を迎えた現在、それぞれの役割をきちんと果たしているのだろうか、また、それが入居者の満足度向上に役立っているのだろうかと考えるようになりました。そこで今回は、入居後間もないご入居者を通して、施設(介護付有料老人ホーム)におけるケアマネジャーの役割について今一度振り返ってみることにしました。

【内容】

今回は、特に、「入居後間もないご入居者の満足度」という点に着目してみました。当ホームでは入居から 1 ヶ月経過時に面談を行っています。入居後 1 ヶ月面談は、原則としてご入居者本人、身元引受人、生活相談員、ケアマネジャーで行います。もちろん入居前に、主に生活相談員が、入居を決めた経緯やご入居者のご家族の思い、ホーム生活に対する希望などを聞き取ります。また、ケアマネジャーとしてアセスメントも実施します。しかし、有料老人ホームでの生活は入居前にはなかなか想像がつかず、実際に生活してみないと分からないことがたくさんあります。そこで、当ホームに入居して 1 ヶ月が経過した時点で面談を行い、入居前に思っていたことと入居後の思いのズレをお聞きするのが目的の一つです。また、当ホームの考えをお伝えしたり、有料老人ホームでの生活をより豊かなものにするためのアドバイスをしたりする機会でもあります。そして、その面談記録は各職種に伝達し、ホームとして情報を共有します。ここでは、入居後 1 ヶ月面談によりその後のご入居者の満足度が向上した事例と、面談は行ったもののご入居者やご家族の本当の思いが十分に聞き取れず、反省をした事例のそれぞれを発表します。

【結果・考察】

反省をする事例では、入居後 1 ヶ月面談の中では表明しなかったものの、実はホームでの生活に不満や不安があったことが後日わかりました。面談の際の質問内容を含め、ケアマネジャーとしての面接技法を高める必要性を感じています。また、全体として、ご入居者の満足度には「介護技術そのもの」よりも「自分が気にかけている」と感じているかどうかが比較的大きな影響を与えていることがわかりました。たとえば、入居後間もないご入居者に対する職員の気づかいや、ケアの最中の介護職員との会話などがあげられます。ケアマネジャーとしてモニタリングを行い、プランに反映させるという役割はもちろんのこと、ご入居者一人ひとりの生活歴をより深く把握したうえで、ご入居者やご家族と日常的なコミュニケーションを積み重ねていくことが大切だとわかりました。その結果が、より良いケアプランにもつながっていきます。ご入居者に「このホームに入ってよかった！」と心から思っただけのように、生活相談員とも連携し、ご入居者、ご家族、職員をつなぐチームの中心として努力を続けます。

チャレンジ ～自分らしく生きる～

マザアス南柏

介護職員 齋藤剛史・伊藤正光

1 ホーム概要 (2019 年 7 月 1 日現在)

- ・ 類 型 : 介護付有料老人ホーム (一般型特定施設入居者生活介護)
- ・ 開 設 日 : 平成 5 年 6 月 1 日
- ・ 居 室 数 : 105 室
- ・ 入 居 者 数 : 102 人 (男性 24 人・女性 78 人)
- ・ 平 均 年 齢 : 88.1 歳
- ・ 要介護者数等 : 90 人 (自立 1 人 要支援 11 人・要介護 90 人、平均要介護度 2.7)
- ・ 職 員 数 : 総数 96 人 うち直接処遇職員(常勤換算) 介護 67.2 人・看護 11 人

マザアス南柏は、お客様にきめ細やかにおもてなしするホテルをイメージしつつ、ご家族への信頼にも応えられ、心安らぐご自宅のような暮らしを提供します。また、これまでの自分を変えることなく、お一人おひとりが歩んで来られた歴史をいつまでも大切に“あるがままに、我がままに”暮らしていただけるような住まいを目指します。

2 事例紹介

【はじめに】

在宅で奥様と生活されていた I 様が、先天性起立性低血圧との診断後、肺炎を患い入院。身体状況が低下し、今まで出来ていたことが自由にできなくなり施設入居を決断。

入居後は車椅子を使用されていたが、リハビリにより歩行器歩行まで行えるようになった。しかし再度肺炎を患いベッド上での生活が主体となってしまった。そのような逆境にも負けず、施設での生活を充実させ、生きる希望を見出していった。そんなご入居者のその時その時の目標に向かって、ご本人とご家族及び、多職種で協力しチャレンジしている事例を報告する。

【方法・内容】

I 様 : 93 歳 男性 要介護 3 外傷性くも膜下出血 先天性起立性低血圧 肺炎 元鉄鋼メーカー会長
「本人」と「家族」の〈想い〉に焦点をあて、その想いに向かってチャレンジできるよう、日常生活の中で支援を行った

- 1) 本人の想い ・『歩けるようになりたい』、『食べることを楽しみたい』
- 2) 家族の想い ・起きられる時に、アクティビティやイベントに参加し生きる希望を持たせて欲しい
・家族との団欒の機会を持ち、楽しく会話する時間を持ちたい
・口から食べることの楽しさを持ってもらいたい

〈チャレンジへの取り組み〉

- ・歩きたい想いに対して、ベッド上の生活から離床をすることで生活にメリハリがつくよう多職種が連携し、家族との団欒、アクティビティやイベントに参加し、最終的に歩くことを目標に支援を続けている。
- ・食事を楽しく安全に召し上がって頂くため、食事姿勢や提供方法、口腔ケアの統一を徹底。また、食べたいものをご本人に選んでいただき、食べる楽しさを感じてもらう。

【結果・考察】

ご本人やご家族の想いを汲み取った結果、チャレンジをして希望を持つということが生きる活力になり、また回復への第一歩となっている。また、その想いに応えていくことにより、ご本人、ご家族にとっても一つ一つが大切な時間となり、職員間での連携強化にも繋がっている。

I 様の目標に向かって、介護職員、リハビリ職員、看護師が専門性を発揮していくことで、今後もご本人の目標が実現できるよう、多職種で支援する必要がある。

骨折り損はさせません！

～骨密度を増やしてより健康に～

湯河原〈ゆうゆうの里〉
介護職員 深沢小百合

1 ホーム概要 (2019 年 8 月 1 日現在)

- ・ 類 型 : 介護付有料老人ホーム (一般型特定施設入居者生活介護)
- ・ 開 設 日 : 1983 年 9 月 1 日
- ・ 居 室 数 : 277 室 (一般居室 238 室・介護居室 39 室)
- ・ 入 居 者 数 : 331 人 (男性 105 人・女性 226 人)
- ・ 平 均 年 齢 : 82.6 歳 (男性 81.6 歳・女性 83.1 歳)
- ・ 要介護者数等 : 82 人 (要支援 34 人・要介護 48 人、平均要介護度 1.52)
- ・ 職 員 数 : 総数 130 人 うち直接処遇職員 (常勤換算) 介護 62.5 人・看護 4 人

2 事例紹介

【目的】

職員は入居者に健康に年を重ねてもらいたいと考えている。しかし加齢による全身機能低下は避けられず、特に骨密度が低下すると骨粗鬆症や変形性膝関節症、圧迫骨折になりやすく、元気に過ごすことが難しくなる。骨密度を上げるために日常どのようなことに気をつけるのが良いのか調査し実施することで、強い骨作りを目指し取組むことにした。

【方法】

取組期間: 2016(H28)年 9 月～2018(H30)年 8 月

1. 2016(H28)年 2017(H29)年と業者へ依頼し、骨密度測定を実施。測定方法は超音波法。
2. 入居者自身が日常気をつけていることをアンケート調査し、骨密度測定の結果の違いを調べる。
3. 医師による予防医学の講演会を実施、また骨密度を上げるために必要な食事・運動・日光浴についての冊子を作成し配布、これらを参考にすることで骨密度は維持または上昇できると仮説を立てた。
4. 2 年連続して測定をした人 99 名の結果を比較し、維持または上昇した人を対象に再度アンケート調査を行い、前年度の実践内容との違いや共通する傾向を見出してみる。

【結果・考察】

1. 骨密度測定に 2016(H28)年は 154 名、2017(H29)年 122 名の入居者が参加した。
2. アンケートでは、154 名中 108 名と回答率は 70%。回答者の 98%の方は骨密度を上げるために何かしら実践している、または気をつけていると答え、入居者の意識の高さが伺えた。
3. 予防医学の講演会や冊子を参考に、基礎知識を学ぶことで骨密度アップ方法の見直しに繋がった。
4. 測定器具の違いからか、全体的に 2017(H29)年の結果は低かった。その中でも数値を維持できた人は 7 人、上昇している人は 14 名であった。再度アンケートと聞き取り調査では、毎日継続して食事・運動・日光浴について注意し実践している、また医師に相談、内服処方、注射を行っている人が多かった。骨密度を上げるには、運動・食事・日光浴のすべてが有効であることが裏付けられた。特に運動では、散歩より負荷をかけるアスレチックジムのほうが有効であり、そして室内の運動でも毎日の継続が大切であると考えられた。また食事からのたんぱく質やカルシウムの摂取は限界があるため、医師に相談し内服処方や注射を行う事も有効である。

【結論】

年齢とともに骨密度は低下するが、意識を高く持ち実践することでその低下を最小限に抑えることは可能である。また自分の骨密度を知ることが、生活の見直しにもつながる。課題として、研究での 2 回しか骨密度測定をしていない。入居者の意識も高い為、測定器具の購入を検討し、これからも継続して骨密度測定を行い、健康に年を重ね、いつまでも元気にその人らしく〈ゆうゆうの里〉での生活を楽しんで過ごしてもらいたい。

突然訪れた介入拒否の入居者との関わりの記録

～介入困難であった一般入居者が介護保険の利用を始めるその時～

サン・ラポール南房総
介護ヘルパー 嶋野洋子

1 ホーム概要 (2019 年 7 月 1 日現在)

- ・ 類 型 : 介護付有料老人ホーム (一般型特定施設入居者生活介護)
- ・ 開 設 日 : 1988 年 9 月 30 日
- ・ 居 室 数 : 240 室 (一般居室 240 室・介護居室 0 室)
- ・ 入 居 者 数 : 278 人 (男性 86 人・女性 192 人)
- ・ 平 均 年 齢 : 83.7 歳 (男性 82.8 歳・女性 84.1 歳)
- ・ 要介護者数等 : 83 人 (要支援 21 人・要介護 62 人、平均要介護度 1.9)
- ・ 職 員 数 : 総数 99 人 うち直接処遇職員(常勤換算) 介護 34.1 人・看護 5.8 人

2 事例紹介

【はじめに】

他者との関わりに消極的でヘルパーの介入の少なかった一般入居者のお二人が体調不良をきっかけに介護室での療養、介護保険の利用を開始し今どのように生活されているかの記録です。

【内容】

M様(女性 87 歳)

身体的に障害のある方で入居後はヘルパーの介入に消極的でしたが、昨年8月体調不良をきっかけに介護室での療養生活となりました。自身の状態を早く理解できたことで身体介助・リハビリはスムーズに進み約半年の介護室生活を経て居室復帰されました。

I 様(男性 84 歳)

入居後7カ月が経とうとした今年3月体調を崩され介護室での療養となりました。入院と介護室での療養を繰り返す中で徐々に職員の介入を受け入れられるようになり、また他入居者やヘルパーとの関わりも増えリハビリにも積極的に取り組むようになり7月に居室復帰されました。

【結果・考察】

お二人は体調不良をきっかけに介護保険を利用されヘルパーの介助を受けることになりました。初めは介入を拒まれていたお二人も介護室でヘルパーの介助を受け、他の入居者との関わりを持つことで心境に変化がおき、現在居室復帰された後も介入の拒否は無く、毎日介護室に来て他者との関わりを持つことを楽しみにし、良い生活のリズムを作ることができました。

今後一般入居者の方に対して、体調不良になってから関わりを持つのではなく、悪くなる前からヘルパーが関わりを持つことができるような環境をつくるのが大切だと感じました。そのためには、日頃からコミュニケーションを取ることと体調の変化や生活環境を把握することを心掛けていきたいと思います。

自立支援プロジェクト

エスペランサ登戸ホーム
介護職員 堀内友貴

1 ホーム概要 (2019 年 7 月 1 日現在)

- ・ 類 型 : 介護付有料老人ホーム (一般型特定施設入居者生活介護)
- ・ 開 設 日 : 2004 年 11 月 1 日
- ・ 居 室 数 : 38 室 (一般居室 0 室・介護居室 38 室)
- ・ 入 居 者 数 : 38 人 (男性 5 人・女性 33 人)
- ・ 平 均 年 齢 : 88.4 歳 (男性 89.6 歳・女性 88.3 歳)
- ・ 要介護者数等 : 38 人 (要支援 6 人・要介護 32 人、平均要介護度 2.5)
- ・ 職 員 数 : 総数 28 人 うち直接処遇職員(常勤換算) 介護 14.6 人・看護 2.6 人

2 事例紹介

【はじめに】

当ホームにて多職種連携の「自立支援プロジェクト」を発足。ADL の低下が顕著にみられた方や緊急的に支援が必要になった方には、プロジェクトをご入居者様ごとに立ち上げ、それぞれの専門職の目線からの課題、アプローチ方法を共有する事で、集中的に取り組む。プロジェクトを通じて、各専門職からの学びもあり、新しいアプローチ方法も見つける事ができ、ご入居者様に対しても全スタッフが統一の声かけ援助が出来る。今回は、S 様の「自立支援プロジェクト」を一例に挙げ発表させていただく。

【方法・内容】

「水分」「栄養」「運動」「排便」の4つの基本介護論を、継続的に実践する事を基本にした、「自立支援プロジェクト」を立ち上げる。自立支援プロジェクトを立ち上げる際は、ケアマネジャーがご家族様にプロジェクト内容を説明し、同意を得る。その際、ご家族様より入居前の生活暦や要望等を再度お伺いする。ご家族様との話し合いを基に、プロジェクトの目標を設定し、介護方法や生活のリズム等を決めていく。また、往診医にも看護師より説明し、往診の度に往診医へご入居者様の現在の状態を報告することで、定期的にアドバイスを頂いている。このように介護士だけではなく、ケアマネジャー、看護師、理学療法士、往診医など異なる専門職がお互いの知識や技術を持ち寄り、連携しながらケアにあたっている。

プロジェクトごとの専用情報共有のツールを用いて、1週間後にカンファレンスを実施し、個々に感じたご入居者様の小さな変化を共有する事から、新しい次のアプローチ方法を考え、集中的に取り組む。それぞれの単一的な介護では、成功した声掛けを継続的に行うことにも限界があるが、専門職からの具体的なアドバイスをチームで共有する事で全スタッフに伝わりやすくなる

今回の S 様の場合は、食べ物を買いに出来る事が多く、食べることも好きだったとの事だったので「車椅子を使用して一緒に近くのスーパーへ買い物に行き、好きな物を買って召し上がっていただく」という、最初の目標を設定する事から始めた

【結果・考察】

自立支援プロジェクトを立ち上げ、短期集中的にケアする事、多職種のメンバー構成にする事、ご家族様、往診医にも報告する事でより専門的で多方面からのアプローチ方法を考え実践する事が可能となっている。

プロジェクトをきっかけにプロジェクトメンバーだけでなく、全スタッフの視野が広がり「連携」することの大切さを知り、「個別ケア」の意識が強くなった。

改めてその人の事を知り、その人の本当に望んでいることを考え、
その方に本当に必要な目標は何か。本当に必要なケアはなにか。
「その人らしさ」を大切にしたい介護が実践出来るようになった。

トイレで快便、快・生活

～薬剤に頼らない排便コントロールをめざして～

ネオ・サミット茅ヶ崎ケアレジデンス
介護職員 菅原美里・小熊尚樹

1 ホーム概要 (2019 年 7 月 1 日現在)

- ・ 類 型 : 介護付有料老人ホーム (一般型特定施設入居者生活介護)
- ・ 開 設 日 : 2013 年 10 月 1 日
- ・ 居 室 数 : 50 室 (一般居室 0 室・介護居室 50 室)
- ・ 入 居 者 数 : 48 人 (男性 4 人・女性 44 人)
- ・ 平 均 年 齢 : 90.4 歳 (男性 90.8 歳・女性 90.4 歳)
- ・ 要介護者数等 : 48 人 (要支援 8 人・要介護 40 人、平均要介護度 2.2)
- ・ 職 員 数 : 総数 50 人 うち直接処遇職員(常勤換算) 介護 18.5 人・看護 3.5 人

2 事例紹介

【はじめに】

日常生活の支援で特に関わりの多い排泄ケアにおいて、定期的な排便がみられるようにケアすることは大切なケアと言える。高齢者に多くみられる便秘の対応には下剤を使用する事が多いが、使用方法によっては身体的・精神的苦痛を与えかねない。S 様は、便秘対応に下剤を服用されているが認知機能の低下に伴い、トイレに行く事も難しくなり、水様便や泥状便を失禁されることも多い。保清ケアへの強い抵抗や夜間の弄便による寝具等の汚染もあり、不快な思いをされ、安眠の妨げにもなっていた。排泄行為は羞恥心や自尊心に関わるだけに、排泄の失敗は生活意欲に大きなダメージを与えてしまう。排便コントロールを見直すことで S 様の QOL を高められないかと考え、薬剤に頼らない排便コントロールに取り組んだ。

【方法・内容】

《対象者》 S 様 (91 歳女性) 要介護 3 既往歴:アルツハイマー型認知症、高脂血症、便秘症
趣味:音楽鑑賞 性格:とても明るく、花が大好き。

《目的》 下剤に頼らない排便コントロールが出来る。

《方法》 排便までのプロセスには、下剤による腸への働きかけだけではなく、日常の生活習慣も大きく関わることに着目し、生活習慣の改善を行う。

- ① S 様の個別性を考慮したトイレへの誘導方法の継続
- ② 食事と水分摂取への支援
- ③ 看護師との排便状況の共有

【結果・考察】

生活習慣が改善でき、便性状はやや軟らかい便から普通便に落ち着いた。トイレでの排泄も習慣となり、トイレでの排便回数は増加し、不快感による弄便もなくなった。薬剤の使用日数は徐々に減少し、便秘時に服用していた下剤は最終的には、「使用なし」となった。

この結果は、排便までのプロセスに日常の生活習慣が深く関係することに着目し、トイレでの排泄の習慣化や食生活など S 様の生活習慣の改善に向け、日常生活に関わった私たち介護者の日々の支援の積み重ねと多職種との連携によってもたらされた、と考える。

【まとめ】

生活意欲に大きな影響を及ぼす排泄の支援に日々、密接に関わる私たち介護者の役割はとても重要だと言える。排泄ケアをはじめとした日常生活への様々な支援、そこから導かれる QOL の向上は、私たち介護者だからこそ出来ること、私たち介護者にしか出来ないことではないだろうか。また、他職種がそれぞれの専門性を発揮し、連携を取りながら支援することで更に QOL は高まるのではないかな。この「介護」という仕事に誇りを持ち、ご入居者の生活に関わっていききたい。

エンド・オブ・ライフの過ごし方

～介護施設はいかがでしょうか？～

そんぽの家 はるひ野
看護職員 朝比奈悦子

1 ホーム概要 (2019 年 7 月 1 日現在)

- ・ 類 型 : 介護付有料老人ホーム (一般型特定施設入居者生活介護)
- ・ 開 設 日 : 2006 年 7 月 1 日
- ・ 居 室 数 : 100 室 (一般居室 100 室・介護居室 0 室)
- ・ 入 居 者 数 : 93 人 (男性 20 人・女性 73 人)
- ・ 平 均 年 齢 : 88.4 歳 (男性 87.5 歳・女性 88.6 歳)
- ・ 要介護者数等 : 93 人 (要支援 18 人・要介護 75 人、平均要介護度 2.4)
- ・ 職 員 数 : 総数 50 人 うち直接処遇職員(常勤換算) 介護 31.4 人・看護 4.6 人

2 事例紹介

【はじめに】

私が勤めるホームは、近隣の緩和ケア病棟や急性期病棟、在宅から多くのお客様が転入居されてみえます。がん、非がんを問わず終末期の全身状態が不安定な方も多く、昨年度のお看取り件数は 16 件で、その内訳は疾患の悪化によるものが大半でした。お客様の年齢は 48～100 歳以上とかなり幅が広く、入居期間も数日～年単位とばらつきがある中で私たちはエンド・オブ・ライフケアを提供しています。では、病院や自宅からホームに入居されるお客様は、どのような気持ちで老人ホームを選択されるのでしょうか。入居されたお客様は、どこでどんな最期を迎えたいと思ってみえるのでしょうか…これらを明らかにするため、本研究に取り組みました。

【方法・内容】

調査方法はインタビューで自由な発言を促す自由面接法としました。事前に対象者 6 名に質問項目と目的を、書面および口頭で説明しインタビュー参加の同意を得ました。インタビューの内容は IC レコーダーに録音し、インタビュー時には第三者も同席しました。第三者はお客様の表情や態度などの非言語的データを観察するとともに、質問に誘導はないかを確認しました。質問にはインタビューガイド①～⑤を準備しましたが、できるだけお客様の自由な発言を促進しました。

【結果・考察】

インタビューの結果から「お客様が望むエンド・オブ・ライフ」について分析し明らかにしました。

お客様と私たちが共通した認識を持ち、都度確認していくことは、今を生きるための援助になると感じています。自分がもし万が一の時は、代わりに考えて自分の意志の通りにしてもらえという信頼を持つことができたなら、気持ちが楽になり、終末期の身体的苦痛をも軽減するでしょう。日常のケアで関わるときの世間話の中にも、より深いお話ができるようになりました。アドバンス・ケア・プランニングの「意思決定の継続した確認」「自発的な行動」につながっています。

【まとめ】

私たちのもっとも重要なことは、お客様の「エンド・オブ・ライフケアの希望」を実際のケアプランに立案し、具体的なケアを提供していくことです。ケアプランに基づいたケアこそが私たちの商品です。

当ホームは 24 時間の看護体制ではありません。夜間の症状悪化、薬剤の選択使用や急変への対応もあります。その中でエンド・オブ・ライフの症状緩和や具体的なケア介入をしていく、その実際のケアプランをこれからチームで作っていきたいと思っています。

自宅や病院ではない、ホームだからこそできるエンド・オブ・ライフのケアが私たちにはあると思います。

リハビリ介護士を目指して

～オールフィレンツェで挑む～

フィレンツェライフ青山

介護士 林直人・看護師 村井雅子・機能訓練指導員 中村匡志み

1 ホーム概要 (2019年4月現在)

- ・ 類 型 : 介護付有料老人ホーム (一般型特定施設入居者生活介護)
- ・ 開 設 日 : 1993年2月1日
- ・ 居 室 数 : 86室 (一般: 79室、介護: 7室)
- ・ 入 居 者 数 : 81人 (男性: 25名、女性: 56名)
- ・ 平 均 年 齢 : 86.9歳 (男性: 86.7歳、女性: 87歳)
- ・ 要介護者数等 : 71人 (要支援24人・要介護47人)
- ・ 職 員 数 : 総数74人 うち直接処遇職員(常勤換算) 介護27.6人・看護8.02人

2 事例紹介

【背景】

フィレンツェライフ青山は開設から25年が過ぎ、ご入居者の高齢化、状態の重度化・多様化を日々感じている。それらに対する生活リハビリをいかに実施していくのか、ADLを維持していくのか、QOLを高めていくのか…という事が課題であった。機能訓練士だけでは補えない日々の生活リハビリを、限られた条件の中で行っていく為には、やはりご入居者に接する機会の多い介護士の力が不可欠であると考え、皆でホームでの生活リハビリの在り方を検討した。

【考察】

まず始めに機能訓練計画書の見直しを行った。これまでは生活目標の設定が、「こうなってほしい…」というスタッフ目線で作られていたが、これを「こう在りたい…」というご入居者目線に変更した。その事により、ご入居者には生きがい、スタッフにはやりがいを感じてもらえるのではと考えた。その目標に対しプログラムを決め、日々の生活の中で無理なくトレーニングを実施できるよう計画した。その中で「リハビリ介護士」という理想像を描き、体制変更やライン業務の見直しなど様々な改革を行った。

【結論】

看護・介護同時巡回、作業療法士による動作訓練の指導、機能訓練部に看護師や介護部リーダー経験者を加える事によって、日々の業務ラインの中で出来る生活リハビリを実施していけるようになった。加えて、外気浴や散歩、花見など季節を感じて頂く機会を現場スタッフだけでなく、ホーム一丸となって作る事により、ご入居者の満足と同時に、他職種連携に繋がった。

働き方改革

～サービスの質を落とさない時間削減方法～

ライフ&シニアハウス川越南七彩の街
施設長 平野勝仁・生活相談員 郷右近渚沙

1 ホーム概要 (2019年7月1日現在)

- ・ 類 型 : 介護付有料老人ホーム (一般型特定施設入居者生活介護)
- ・ 開 設 日 : 2005年9月1日
- ・ 居 室 数 : 92室 (一般居室 60室・介護居室 32室)
- ・ 入 居 者 数 : 88人 (男性 25人・女性 63人)
- ・ 平 均 年 齢 : 83.1歳 (男性 82.1歳・女性 83.5歳)
- ・ 要介護者数等 : 51人 (要支援 12人・要介護 39人、平均要介護度 2.4)
- ・ 職 員 数 : 総数 50人 うち直接処遇職員(常勤換算) 介護 17.1人・看護 2.4人

2 事例紹介

【はじめに】

ライフ&シニアハウス川越南 七彩の街では、最近会社が規定する公休数の確保が困難になっています。採用も中々思うように進まず、人員が充足し公休がとれるようになると退職者が出るということの繰り返し。「いつになったら会社の規定する公休通りにとれるようになるのか」との声が多く寄せられるようになった。

そこで誰かが何かをしてくれるのを待っているだけでは公休をとれるようにならない。公休を取れるようになるために現場として何か改善できることはないかと考え、業務を全体的に見直すことから始めることにしたのが、この活動のはじまりです。

【方法・内容】

現在のスタッフ数及び常勤換算数を算出し、会社が規定している人員数に足りているのかそれとも足りていないのか数字として見える化をしました。

結果、常勤換算数では会社が規定している数字を超えており、会社が規定している人員としては、足りているという結果になりました。

しかし、現場は人が足りないと感じています。「なぜ人が足りないと感じているのか」「業務をやりすぎていないのか」など今の業務が適切かどうかを再度見直すことにしました。

まず、この結果を活動しているメンバーで議論し、会議に参加していないスタッフの意見を吸い上げるところからはじめました。個々に「これは本当はやらなくてもよいのでは?」「今は対象の方がいないから見直してもよいのでは?」などの意見があがりました。

あがった意見を元に、全体のシフト構成を見直し現在の入居者に対するスタッフの動きを見直しました。

【結果・考察】

フロア構成を確認。2フロアの内1階のフロアは介護度が軽い人が多くなっていたことや、入居者数が少なくなっていたため、スタッフの配置を1人減らしました。

2階のフロアは徘徊する方や重介護の方が多かったため、スタッフ配置を変更しませんでした。

また、入浴シフトも機械浴利用者が多くなり、一般浴利用者が少なかったため、一般浴を1日に凝縮し、今まで確保していた2枠を1枠に減らしたことでシフト数は2シフト削減。スタッフの公休にあてることができました。

しかし、結果的にスタッフの退職等が続き、シフトは減少しましたが公休数は確保できないままになっており、活動が達成できたとはいえない結果となりました。

ホーム内における働き方改革

～働きやすい職場づくり～

シルバーシティむさしの櫛館
ヘルパー長 江藤祐二

1 ホーム概要 (2019 年 7 月 1 日現在)

- ・ 類 型 : 介護付有料老人ホーム (一般型特定施設入居者生活介護)
- ・ 開 設 日 : 2013 年 10 月 1 日
- ・ 居 室 数 : 39 室 (一般居室 39 室・介護居室 0 室)
- ・ 入 居 者 数 : 30 人 (男性 10 人・女性 20 人)
- ・ 平 均 年 齢 : 88 歳 (男性 90.8 歳・女性 85.2 歳)
- ・ 要介護者数等 : 29 人 (要支援 3 人・要介護 26 人、平均要介護度 2.2)
- ・ 職 員 数 : 総数 29 人 うち直接処遇職員(常勤換算) 介護 13.2 人・看護 4.3 人

2 事例紹介

【はじめに】

2018 年 10 月に着任後、社員の残業の多さに危機感を覚えた。社員間の業務分担に隔たりがあった為、同僚たちと「働き方改革」に取り組むことにした。

【方法・内容】

取り組むにあたり、2018 年上期の入居者数と残業時間との対比を行うが、関係性は認められなかった。

そこで実態把握の為、タイムカードに当日の残業時間、月間累計を手書きで記入する事を始めた。この事が、後に残業に対する社員一人ひとりの意識改革に繋がった。

次に、毎月 15 日に実施する社員ミーティングの際に、当日までの残業時間実績と、実績を踏まえた月末の見込時間を社員に伝える事とした。その結果、15 日以降の勤務シフトの変更や、社員間で無駄な残業にならぬような声掛けが出来る様になった。

更に、日常業務の人員配置や業務分担の見直しについて社員間で話し合い、業務の効率化に取り組んだ。1 つ目は入浴業務全般について。従来の入浴日は、ADL を考慮しご利用される浴槽の種類が基準となっていたが、脱衣室を中心に個浴、中間浴、機械浴となっている設備上の動線を有効活用して、ご入浴者がそれぞれ適切な浴槽を並行してご利用頂けるように改めた。併せて、既定の入浴回数以外に、ご希望者にはご家族様のご了承を得て、日曜日に自由に個浴槽をご利用頂くようにした。

2 つ目は、夜勤職員不足を解消した事である。当ホームは夜勤専従者 2 名体制だが、欠員発生時の補充要員として、日勤社員が夜勤業務となる。その影響による日勤帯人員の減少を防ぎ、残業時間増加要因とならぬよう、必要人員を確保した。また、同時にタイムスケジュールの見直しも行い、夜勤業務の改善を図った。

【結果・考察】

今回の成果として、2018 年 4 月の社員一人あたりの残業時間は約 43 時間だったが、同年度下期の残業時間は 22 時間となり、ほぼ半減した。また、業務の隔たりも少なくなり、残業時間は大幅に改善。今年度の経過は、1 人当たり月平均 21 時間となっている。

考察として、残業を減らす事は、職員の体力はもちろん気持ちに余裕が出来る為、質の高いサービス提供に繋がっている事を実感している。

職場の雰囲気も良くなり、これからも残業削減や業務の効率化を考えながら、働きやすい職場作りに取り組んでいきたいと考えている。

〈ゆうゆうの里〉で最期を迎えたい

～看取り介護への取り組み～

佐倉〈ゆうゆうの里〉
計画作成担当 塚本彩子

1 ホーム概要(2019年7月1日現在)

- ・ 類 型 : 介護付有料老人ホーム(一般型特定施設入居者生活介護)
- ・ 開 設 日 : 1988年5月18日
- ・ 居 室 数 : 379室 (一般居室282室・介護居室97室)
- ・ 入 居 者 数 : 442人 (男性132人・女性310人)
- ・ 平 均 年 齢 : 83.8歳 (男性82.1歳・女性84.3歳)
- ・ 要介護者数等 : 145人 (要支援58人・要介護87人、平均要介護度2.0)
- ・ 職 員 数 : 総数190人 うち直接処遇職員(常勤換算) 介護99.2人・看護4.1人

2 事例紹介

【はじめに】

佐倉〈ゆうゆうの里〉では、最期までその人らしく生活していただくために、希望される方へ看取り介護を行っているが、入居者からは「実際、どんな事をしているのか?」「最期は病院にお願いすればいいと思っているのでは?」など、質問を受ける事がある。

日本は、すでに超高齢社会を迎え、近い将来「看取り場所の不足」が、深刻な社会問題として懸念されている。これまでは、実績や入居者への周知が少ない状況があった。

終の棲家として〈ゆうゆうの里〉を選んでくださった入居者に、「暮らし場所においての看取り」「最期まで安心」を、より充実して提供できるよう取り組みを報告する。

【方法・内容】

- 日本の高齢社会の現状調査(厚生労働省資料より)
- 施設内で使用している「私の医療に対する希望(終末期になった時)」「現在「私のリビングウィル」へ書式改定)の提出状況、内容分析
- 佐倉〈ゆうゆうの里〉での看取り介護の現状を振り返る

【結果・考察】

終末期医療に対する希望を事前に伺った事で、ご本人が、ご家族と事前にコミュニケーションをとるきっかけとなり、看取り期に、意思表示できない状態であっても、家族が本人の思いを代弁でき、話し合いをスムーズに行う事ができるようになった。

〈ゆうゆうの里〉で看取りを希望する方が増え、きめ細やかな対応を行う事で、入居者や家族の安心や満足度が上がり、職員もスキルを上げる事につながった。

佐倉〈ゆうゆうの里〉での看取り介護の課題として、職員の知識、技術の更なる向上、入居者への周知があげられる。

少しずつ看取り介護の実績が上がってきているが、入居者への周知は十分ではないと思われる。

いざという時に「〈ゆうゆうの里〉で、最期まで過ごす選択肢があります。」という事を、計画作成担当者を始め、職員が自信を持って、入居者へお伝えできる事が重要。

終末期医療の確認を行う事は、入居者自身が、最期をどう迎えたいかを考え、家族、医療職、介護職と、意志を共有する機会となっているので、今後も取り組みを継続していきたい。

『できない』から『どうすればできる』に意識を変えた業務改善 ～「多忙感調査」で問題の見える化～

サンライフ寿

介護職員 武田 安希子・海川 三千子・藤田 恵子・伊藤けさみ

1 ホーム概要 (2019 年 7 月 1 日現在)

- ・ 類 型 : 介護付有料老人ホーム (一般型特定施設入居者生活介護)
- ・ 開 設 日 : 1980 年 12 月 1 日
- ・ 居 室 数 : 130 室
- ・ 入 居 者 数 : 139 人 (男性 44 人・女性 95 人)
- ・ 平 均 年 齢 : 87.1 歳 (男性 85.8 歳・女性 87.7 歳)
- ・ 要介護者数等 : 83 人 (要支援 34 人・要介護 49 人・平均要介護度 2.5)
- ・ 職 員 数 : 総数 97 人 うち直接処遇職員(常勤換算) 介護 25.3 人・看護 6 人

2 事例紹介

【はじめに】

『器械浴、リフト浴がいっぱいなので、新規の要介護者の受け入れは難しい』と、つい 2 年前まで当然のように介護現場から声が上がった。当施設においても全国と同様、入居者の高齢化・介護度の上昇に伴う多様化、急増するニーズに対応する介護職員の不足感が続いた。その中で、日頃会社の理念、年次目標である入居率の向上等を目にしても、『介護を一生懸命すればそれで良い』『忙しくなると今までの介護ができない』と『今までの当たり前』から抜け出せずにいた。しかし、昨年度、入居者の管理費値上げ検討をきっかけに、社員が会社の経営状況、入居者数の推移や現状問題、2025 年問題、働き方改革等を再度学び、『自分たちは何をすべきか』を話し合った。そして、『問題の見える化』を行うために多忙感調査を実施し、業務改善を図っていく事とした。

【方法】

取り組み期間: 令和元年 6 月～9 月

1) 多忙感調査の実施。(6 月初旬)

- ・出勤職員の 10 分毎の多忙感を 5 段階で自己評価し記録する。(日中 3 日・夜間 7 日)
- ・自己評価した結果を集計し、問題点と対策を検討する。

2) できる対策から取り組み、評価する。

【結果・考察】

1) 7 時台・18 時台・20 時台は経験年数に関係なく、ほとんどの人が多忙感を強く感じていた。

対策➡増員(業務内容の見直し・業務の専門化・勤務時間の変更・他職種からの支援)

2) 比較的経験年数が少ない人の方が多忙感を強く感じていた。

対策➡人財育成(OJT・業務支援・研修参加)

3) 同じ業務内容にもかかわらず、個人によって感じ方に差がある傾向がある。(業務量・精神的)

対策➡業務内容の見直し・職員間のコミュニケーションを多く取る

・残務調整・個人の力量に合わせた支援

【結論】

- 1) 多忙感調査により『問題の見える化』ができ【結果・考察】1) 2) 3)を実施することにより、入居率の向上、時間外の削減、年次有給休暇取得が増加した。
- 2) 目に見えるデータをもとに他職種に働きかけることで、業務量が多いことを理解してもらえ、会社全体の協力体制が強化された。
- 3) 『できない』から『どうすればできる』へと意識が変わり、個々の目標、部内目標、会社の目標をつなげて考えられるようになった。

我が家は国立公園

～安心があるから自然を楽しめる～

伊豆高原〈ゆうゆうの里〉
介護職員 藤原雅子・野崎修志

1 ホーム概要 (2019 年 7 月 1 日現在)

- ・ 類 型 : 介護付有料老人ホーム (一般型特定施設入居者生活介護)
- ・ 開 設 日 : 1979 年 5 月 15 日
- ・ 居 室 数 : 310 室 (一般居室 285 室・介護居室 25 室)
- ・ 入 居 者 数 : 374 人 (男性 117 人・女性 257 人)
- ・ 平 均 年 齢 : 82.0 歳 (男性 81.1 歳・女性 82.5 歳)
- ・ 要介護者数等 : 98 人 (要支援 24 人・要介護 74 人、平均要介護度 2.6)
- ・ 職 員 数 : 総数 133 人 うち直接処遇職員(常勤換算) 介護 49.7 人・看護 4.5 人

一般財団法人日本老人福祉財団伊豆高原〈ゆうゆうの里〉は富士箱根伊豆国立公園内にあり、2.3 万坪の敷地を有し、「山あり」「海あり」「温泉あり」の自然環境に恵まれた施設である。

(運営理念) ー豊かな福祉社会の実現を目指してー

・私達は、老後の“安心”と“幸せ”を提供することにより社会へ貢献します。

・私達は、はたらく人たちの“人間性”を大切にします。

2 事例紹介

【目的】

伊豆高原〈ゆうゆうの里〉は国立公園内に位置し、自然環境に恵まれた施設である。自然を楽しみながら、日課として散歩をされている方は多い。しかし、年齢とともに歩行状態に不安が出て、外出や散歩はゆうゆうの里内だけになってしまう方もいる。ある日、入居者から「自分の住んでいる棟以外は歩いたことがない」と言われた。すばらしい環境の中で生活されている入居者に、「ゆうゆうの里全体を気兼ねなく安心して自然を楽しんで頂きたい」と思い、ウォーキングマップを作成することとした。

【方法】

取り組み期間:平成 30 年 4 月～9 月

- ① 安全に歩けるコースを考え、3 つのコースを作り距離の測定をする。
- ② コース付近に咲いている植物を調べる。
- ③ コースから見える景色の写真を撮る。
- ④ ①②③を反映させたウォーキングマップを作成する。
- ⑤ ウォーキングマップを施設新聞でお知らせ、ゆうゆうの里コミュニティセンター内 2 か所に掲示する。
- ⑥ 散歩の会にてウォーキングマップを活用。参加者とマップ利用者へ意見・感想を聞き取る。

【結果】

散歩の会参加者より、「ゆうゆうの里に 13 年住んでいるが、このコースを歩いたのは初めて。歩くことができて感激した」「もっと早くこのマップがあればよかった」また、入居検討者からは「これは歩く距離の目安になっていいね」「このマップは施設内がわかりやすい」と感想を聞くことができた。またマップを見ながら歩いた入居者から、「眺めが良く、自然を満喫できる。アップダウンのあるコースを歩くことで体力に自信が持てる」「足元が悪い場所や、手摺りがなく気をつけた方がよい箇所がある」と、感想・意見を聞く事ができた。

【考察】

マップを用いることで、今まで歩くことが憚られていた場所も歩きやすくなった。また、入居検討者を案内することで、施設のことを知ってもらうためのツールとしての役割を果たしたと思われる。

【結論】

今回ウォーキングマップの作成により、入居者がゆうゆうの里全体を楽しんで散歩してもらうための一助となったと思われる。今後の課題として、安全に歩くための注意事項をマップに入れ、遊歩道や、手すり・休憩するベンチを増やすことがあげられる。車椅子に頼らず最期まで自分の足で歩きたいと思う方は多い。自然に恵まれた国立公園にある我が家で、安心して楽しんで生活してほしい。

入院生活から一般居室に戻る時

～自分らしさを再び掴むためのサポート～

ラビドール御宿
介護職員 式田可南子

1 ホーム概要 (2019 年 7 月 1 日現在)

- ・ 類 型 : 介護付有料老人ホーム (一般型特定施設入居者生活介護)
- ・ 開 設 日 : 1990 年 10 月 10 日
- ・ 居 室 数 : 204 室 (一般居室 204 室・介護居室 40 室)
- ・ 入 居 者 数 : 240 人 (男性 86 人・女性 154 人)
- ・ 平 均 年 齢 : 84.8 歳 (男性 83.9 歳・女性 85.3 歳)
- ・ 要介護者数等 : 67 人 (要支援 17 人・要介護 50 人、平均要介護度 2.11)
- ・ 職 員 数 : 総数 73 人 うち直接処遇職員(常勤換算) 介護 35.7 人・看護 4.9 人

2 事例紹介

【はじめに】

転倒、入院により ADL が低下した方が退院時、介護居室を利用することなく一般居室へ戻る際、状況に合わせてレイアウトを変更し、必要な介護用品を導入したことで、安全の確保に努めつつ ADL の向上が図れ、本人の満足感も得られた事例を紹介いたします。

【方法・内容】

- ・ 本人の強い希望により退院後すぐに居室で生活できるように準備が必要なため、生活環境すべての変更が想像の範囲にあり、病院からの情報をもとに福祉機器業者と連携をとり、必要な介護用品(電動ベッド、歩行器)を購入ではなくレンタルとして導入。
- ・ 安全、スムーズな生活動線に留意して居室内レイアウトを変更し、退院を迎えた。退院直後はご本人も満足されていたが、ADL の向上に伴い、徐々に安全を最優先としたレイアウトやレンタル用品に対して不満が出現。
- ・ ご本人の意思を尊重する事をメインとしたうえで安全面の考慮も必要なことを理解して頂き、入院前の環境に近いレイアウトに加え、以前使用していたベッドと歩行器に再度変更した。

【結果・考察】

退院直後は安全確保を優先した事で再転倒することなく、また動線も動きやすく室内での行動範囲が拡大したことにより ADL の向上につながった。その後、ADL や本人の想いの変化に合わせて再度レイアウトを変更したことで安全にも考慮した環境の提供ができ、且つご本人の満足度も充実した生活を取り戻すことができた。

様々な状況に合わせた室内のレイアウト調整が必要であり、個別に合わせた環境調整を行い、更には心身状況の変化にも応じた対応が、ご入居者にとって満足して頂けることを学んだ。

今後もご入居者に向き合い、自分らしい生活をお過ごしいただける環境の提供に努めていきたい。

いつまでも ご夫婦一緒に暮らしを

～一般居室からケア棟へ～

ネオ・サミット湯河原
介護職員 露木伸一・久澤こなみ

1 ホーム概要 (2019 年 7 月 1 日現在)

- ・ 類 型 : 介護付有料老人ホーム (一般型特定施設入居者生活介護)
- ・ 開 設 日 : 1986 年 5 月 17 日
- ・ 居 室 数 : 221 室 (一般居室 191 室・介護居室 30 室うち 5 室が 2 人部屋)
- ・ 入 居 者 数 : 235 人 (男性 71 人・女性 164 人)
- ・ 平 均 年 齢 : 84.0 歳 (男性 82.5 歳・女性 85.0 歳)
- ・ 要介護者数等 : 54 人 (要支援 18 人・要介護 36 人、平均要介護度 1.8)
- ・ 職 員 数 : 総数 87 人 うち直接処遇職員(常勤換算) 介護 18.65 人・看護 4.5 人

2 事例紹介

【はじめに】

当館は自立型の有料老人ホームです。住宅棟と介護が必要になった時に住み替えられるケア棟があり、住み慣れた場所で継続して安心した生活が送れるよう支援させていただいております。現在は、認知症の症状が見受けられる方が年々増加しており、その中でも入居され10年が経過した A 様ご夫妻は、お二人共に物忘れやご自分達のお部屋が分からなくなるなどの症状が見られるようになりました。その A 様ご夫妻の一般居室でのご様子から、ケア棟へ移られてのご様子を通し、ご夫妻の不安を軽減し、安心した生活が送れるよう取り組んだ活動内容・状況及び、現在に至るご様子についての事例をご紹介します。

【方法・内容】

A 様ご夫妻は毎日の買い物や、食堂でのお食事、入浴などいつも一緒に行動されていました。しかし、お二人共に薬を飲んでいない、食事をしていないなどの訴えが多く見られるようになっていく中、入居10年目にご主人様が入院され、奥様は繰り返し「主人はどこに行った」「物を盗られた」などの不穏な言動が続き、ケア棟に入室されました。ご主人様も同様に入院先の病院で不穏状態が続くことで早期の退院となり、ケア棟でのご夫妻の生活が始まりました。しかし、それでも生活は落ち着かない日々が続きました。そこでこのご夫妻を知るため、ひもときシートを活用し、社内で行っている、認知症対応の D's ケアの実践や、環境整備として、馴染みの家具やソファを運び入れ、お二人で寛げる空間を提供させていただきました。

【結果・考察】

当館の特徴の一つとして、ケア棟にも2人部屋があり、ご夫妻が同じ部屋で過ごすことができます。いつも一緒に不安を繰り返し訴えられ、落ち着かない生活をされている A 様ご夫妻に対し、D's ケアや環境整備などを実践したことにより、穏やかな生活を取り戻すことができました。現在では、室内に置かれたソファに寄り添って座られ、仲良く過ごされています。今後も、その人を知ることから始め、個別性に富んだケアを実践していくことが大切だと感じました。

【まとめ】

強い訴えや言動には、その人なりの理由があること、そしてそれはごく自然な行動であることを理解し、スタッフ本位にならないよう、「その方を知り」「その方のありのままを受け入れ」「共に笑顔になれる」を基本理念とした D's ケアを深め、認知症ケアの専門性を高めていきたいと考えます。

心の扉を開く鍵

～それは…～

コンフォートロイヤルライフ多摩
介護職員 米田 淳子

1 ホーム概要 (2019 年 7 月 1 日現在)

- ・ 類 型 : 介護付有料老人ホーム (一般型特定施設入居者生活介護)
- ・ 開 設 日 : 1991 年 7 月 1 日
- ・ 居 室 数 : 157 室 (一般居室 143 室・介護居室 14 室)
- ・ 入 居 者 数 : 140 人 (男性 38 人・女性 102 人)
- ・ 平 均 年 齢 : 86.4 歳 (男性 85.3 歳・女性 86.8 歳)
- ・ 要介護者数等 : 74 人 (要支援 23 人・要介護 51 人、平均要介護度 1.96)
- ・ 職 員 数 : 総数 103 人 うち直接処遇職員(常勤換算) 介護 43.3 人・看護 7.8 人

2 事例紹介

【はじめに】

平成 3 年 7 月のオープン以来 28 年が経過し、ご入居者の平均年齢も 86 歳を超えてきている中、認知症症状だけでなく老人性の精神疾患を持つ方が増加傾向にあり、ご入居者お一人お一人に合わせた、様々な工夫と個別対応が必須となってきている。

終の棲家として選んで頂いた当施設での毎日の生活が、これらの疾患を持つご入居者にとって、安心・快適でより充実した日々となるために、我々職員が持つ専門性を活かした対応とは何か？を考えた。

ご希望を叶え満足していただくためのスキルや、ご入居者のニーズを察知し、多職種による連携の取れた迅速な対応を全職員が共有・実践することで、更なるサービス向上に繋げる事を目的とした。

【方法・内容】

- ① 老人性精神疾患の全国統計と、当施設における同疾患入居者の割合を比較する。
- ② ケアに携わる職員へのアンケート調査の実施。(あなたが考えるご入居者の幸せとは…)
- ③ ご家族が行なった疾患対応や、職員と交わされた情報共有に関する経緯と心情の把握。(今回、事例として今後のサービスに役立てて欲しいと言う、お気持ちに至るまでの経緯)
- ④ 職員に求められる様々な介助内容と、より高いスキルを持つ職員の実践内容を共有することで、職員間のスキルアップに繋がるかを考察。

【結果・考察】

- ① 平成 28 年度総務省統計による老人性の精神疾患罹患者の数値を当施設と照らしあわせ、当施設職員の観察力の高さがわかった。
- ② ①を踏まえ実施したアンケート結果を整理することで、当施設の経営理念が、職員の気持ちを支えている事が明らかになった。
- ③ 職員がその方の希望や想いを汲み取っているかを常に考え、機転の利いた対応でご満足いただけたことで、ご入居者の笑顔が増し、活気や意欲がみられ、様々な問題の解決につながった。信頼関係を築くことが、心を開くキーポイントであり、実施内容に対する満足度が相乗効果を生みだすことが分かった。ご家族から今回の事例研究に活かして欲しいと、ご協力いただけたことが、研究の大きな後押しとなっている。
- ④ 今後この結果をどのように活かして専門性の高い職員の育成に繋がれるかを考察した。実施した内容と結果を周知することで、職員全体の意識が向上し、多職種連携につながった。専門性を活かしたサポート体制の構築と、多職種の個々の力を結集する事は、ご入居者の心の安定、信頼感、幸福感を生み、施設全体の幸せに繋がる事が明確になった。

終の棲家としてご入居頂き、我々のできる最高のサービスが、ご入居者の死生観にまで響き、幸せで安心できる毎日、様々なご希望が叶い、望んでいた暮らしの実現で、最高のファイナルステージの提供となるよう、今後も施設全体で前向きに取り組んでいく事を共有できた。

介護居室から一般居室へ

～環境が変わったことによって～

東急ウェリナ大岡山
介護職員 西美奈子・片白沙織・伊藤文恵

1 ホーム概要 (2019 年 6 月 1 日現在)

- ・ 類 型 : 介護付有料老人ホーム (一般型特定施設入居者生活介護)
- ・ 開 設 日 : 2010 年 9 月 1 日
- ・ 居 室 数 : 165 室 (一般居室 111 室・介護居室 54 室)
- ・ 入 居 者 数 : 154 人 (男性 43 人・女性 111 人)
- ・ 平 均 年 齢 : 86.0 歳 (男性 85.8 歳・女性 86.1 歳)
- ・ 要介護者数等 : 72 人 (要支援 34 人・要介護 38 人、平均要介護度 2.3)
- ・ 職 員 数 : 総数 154 人 うち直接処遇職員(常勤換算) 介護 58 人・看護 9 人

2 事例紹介

【はじめに】

Y 様は、一般居室にて過ごされていたが、平成 30 年 1 月にインフルエンザ B 型と診断され、静養室で一時的に過ごされる。その後、一般居室での生活が不安との事で、介護居室 2 階で 5 か月間過ごすこととなる。移り住み観察期間が終了に伴い、介護居室契約を締結。本人の認知面を考慮し介護居室 3 階に移られる (9 か月間)。

認知面・体調面が回復してきた為、徐々に一般居室で過ごす時間を増やし、平成 31 年 4 月より一般居室での生活をスタートさせる。

＜プロフィール＞

- ・ Y 様 女性 97 歳 要介護 2
- 趣味: 絵画(展覧会等に出展)、お茶(今でもお弟子さんがいらっしゃる)
- 歩行: 歩行器使用
- お手伝いさんが週 1～2 回いらっしゃる

【取り組み・内容】

- ・ 介護フロアの変更
- ・ 職員の介入の頻度を減らす
- ・ 一般居室での生活をする為、他部署との連携

【結果】

- ・ 一般居室で過ごすことが出来るようになった。
- ・ 生活の質が上がり、ご本人の生きる力が戻ってきたご様子見られる。
- ・ リハビリは自分だけで定時に行っており、定時通りに行けたことに充実感を感じている。
- ・ 施設としては何かあった時にサポートできる体制で支援していく事となる。

【考察】

- ・ 介助量が減ったことで「自分で出来る」と自覚され、一般居室へ戻る意欲が芽生えたのではないかな。
- ・ 他入居者様の事例紹介

【まとめ】

- ・ 一般居室で過ごすことに多少のリスクはあるものの、施設全体で支援していく事で本人の望む生活を作る事が出来る。

スムーズな入浴 ～時短・効率見直しを～

センチュリーシティ西千葉
介護職員 渡部晃平・佐藤早希・坂本和也

1 ホーム概要 (2019 年 9 月 1 日現在)

- ・ 類 型 : 介護付有料老人ホーム (一般型特定施設入居者生活介護)
- ・ 開 設 日 : 平成 18 年 6 月 2 日
- ・ 居 室 数 : 60 室 (介護居室 60 室)
- ・ 入 居 者 数 : 47 人 (男性 10 人・女性 37 人)
- ・ 平 均 年 齢 : 88.4 歳 (男性 86.9 歳・女性 88.8 歳)
- ・ 要介護者数等 : 47 人 (要支援 11 人・要介護 36 人、平均要介護度 2.52)

株式会社センチュリーライフは、34 年前に設立し高齢者向け住宅事業を展開してきました。現在、有料老人ホーム 10 ホーム、訪問介護事業所 6 つ、居宅支援事業所 2 つ、通所介護 1 つを運営しております。その中でセンチュリーシティ西千葉は、3 番目にできたホームで、今年で 13 周年を迎えました。人員配置は 2:1 で 24 時間看護師が常駐しています。24 時間対応の在宅診療や緊急対応についても万全な体制でサポートしています。また、アクセスが良く、JR 総武線「西千葉」駅から徒歩 6 分、ビックターミナルの「千葉」駅へ直通で 2 分という好立地です。

2 事例紹介

【はじめに】

今回私達は、入浴業務に的を絞りました。入浴業務が時間内に終わらず、残業や現場のスタッフが足りなくなる事などがあった為、この問題を解決すべく、入浴業務が時間内に終わる回数を増やす為、様々な視点から業務改善に取り組みました。

【方法・内容】

入浴サービスについて、「1 週間で計 12 回実施の内、3 回しか時間内に終わっていない」「入浴介助の負担が大きく、スタッフが大変な思いをしている」「浴室で使用している備品が使いづらい」という現状があり、『朝礼や申し送りに時間がかかりすぎており、次の業務が押すことで入浴開始時間が遅れている』『ご入居者の ADL に変化がでてきており、介護サービスにかかる時間数が増えてきている』『建物は、既存の建物を介護施設として改装した為、ハード面で使いづらさがある』等の問題点が出てきました。では、それをどう解決していくのかをチームで考え、浴室で使用している備品の見直し・整理整頓、業務日誌やその他書式の変更および作成、朝礼の申し送り方法の変更等を行いました。

【結果・考察】

入浴サービスを、1 週間で計 12 回実施している内、時間内に終わる回数が 2 回から 6 回に増えたり、朝礼の終了時間を早くすることで入浴開始時間に遅れないようになったりと業務効率が上がったことで、スタッフの意識にも良い変化が生まれました。今回、入浴業務の効率化をテーマに、それに紐づく様々な視点からアプローチを行いました。この取り組みを通じて、各情報ツールを使用したことで、情報共有がスムーズになり、スタッフ自ら入浴業務についての意見も多くでるようになりました。また、スタッフの意識が変わったことで業務のし忘れが減り、サービスの質も向上されました。今後も、ご入居者の皆様に安心したご生活が迎えられるよう、スタッフは日々向上心を持ち、柔軟にチャレンジし続けることが大切なのだと感じました。

一日の計は睡眠にあり

～睡眠障害に向き合って～

アライブ浜田山
介護職員 和田彩・野澤麻子

1 ホーム概要 (2019 年 7 月 1 日現在)

- ・ 類 型 : 介護付有料老人ホーム (一般型特定施設入居者生活介護)
- ・ 開 設 日 : 2003 年 4 月 1 日
- ・ 居 室 数 : 40 室
- ・ 入 居 者 数 : 38 人 (男性 5 人・女性 33 人)
- ・ 平 均 年 齢 : 86.23 歳 (男性 92.4 歳・女性 87.72 歳)
- ・ 要介護者数等 : 37 人 (要支援 5 人・要介護 32 人、平均要介護度 2.6)
- ・ 職 員 数 : 総数 40 人 うち直接処遇職員(常勤換算) 介護 23.94 人・看護 2.9 人

2 事例紹介

【はじめに】

2018 年 5 月に入居された A 様は、自宅で昼夜逆転の生活を送っていた。入居後は日中の活動量を増やし、不眠症治療薬の内服を開始したが、夜間は排泄のために覚醒することが多かった。そのため睡眠が充分に取れず、日中の覚醒にも影響していた。そこで、睡眠障害の原因となっている「夜間多尿に伴う夜間頻尿」を改善し、睡眠と排泄を整えることが必要だと考えた。

【方法・内容】

- ・ 調査期間: 2018 年 6 月～2018 年 12 月
- ・ 調査対象: A 様 90 歳代 男性 要介護 3 A2/Ⅲa アルツハイマー型認知症 緑内障 鼠径ヘルニア
- 1. 対象者を理解するための調査
本人と家族へのインタビュー
- 2. 「夜間の睡眠と排泄のパターン」と「夜間の覚醒回数」の観察と評価
6 月・9 月・10 月・11 月・12 月
- 3. 取り組み
(1) 日中の活動の見直し
(2) 医師に相談し、水分摂取方法や薬物療法の指示を受けて実施
(3) 睡眠の質を高める取り組みを実施
- 4. 取り組み後に、夜間と日中の変化を確認するためのスタッフアンケート(自由記述)を実施

【結果・考察】

- ① 夜間に排泄のために覚醒する回数が減少した。
 - ・ 取り組み前: 6 回～12 回
 - ・ 取り組み後: 0 回～3 回
- ② 不眠症治療薬と夜尿症治療剤を中止しても睡眠時間が保たれ、排泄回数にも変化はなかった。
- ③ スタッフアンケートでは、「夜間の睡眠と排泄の改善」を認める内容と、「日中の覚醒や活動性の向上」を認める内容が多数を占めた。

取り組み(1)と(2)を行ったことにより、夜間に排泄のために覚醒することが減り、睡眠時間が増加した。さらに、(3)を実施した結果、薬物療法を中止しても睡眠時間は保たれ、日中の覚醒レベルも向上した。これは、レム睡眠・ノンレム睡眠の周期に合わせて「トイレ誘導の時間を設定」し、スムーズに入眠できるように「深部体温を下げる目的で首の後ろを温める」「30 分以下の短い昼寝」「夕方の軽い運動」を行ったことで、質の良い睡眠がとれるようになり、睡眠・覚醒リズムが改善したと考えられる。

届け!私たちの想い、あなたへ

～入居者も職員も安全・安心な対応を行えるように～

佐倉くゆうゆうの里>
介護職員 宮地麻未

1 ホーム概要 (2019 年 7 月 1 日現在)

- ・ 類 型 : 介護付有料老人ホーム (一般型特定施設入居者生活介護)
- ・ 開 設 日 : 1988 年 5 月 18 日
- ・ 居 室 数 : 379 室 (一般居室 282 室・介護居室 97 室)
- ・ 入 居 者 数 : 442 人 (男性 132 人・女性 310 人)
- ・ 平 均 年 齢 : 83.8 歳 (男性 82.1 歳・女性 84.3 歳)
- ・ 要介護者数等 : 145 人 (要支援 58 人・要介護 87 人、平均要介護度 2.0)
- ・ 職 員 数 : 総数 190 人 うち直接処遇職員(常勤換算) 介護 99.2 人・看護 4.1 人

2 事例紹介

【はじめに】

ケアに対して抵抗のある入居者にとって、職員も入居者も、お互い不安を持っている。入居者 A 様のケアを行う際、職員に手を出す、唾を吐く等の行為が見られ、職員からも不安の声が多く聞かれるようになった。A 様と職員お互いが、安全で安心した対応を行える環境を作るためにはどうすれば良いか、研究を行った。

【方法・内容】

対象:A 様(90 代)、2010 年 8 月認知症の診断が下り、薬(アリセプト、メマリー)服薬開始。

入浴、移乗、排泄など、様々な介助の場面で穏やかではない様子が見られる。

- ① 日中の状態と、睡眠・食事量・疲れの関連性を調査
取組み期間:平成 30 年 4 月～現在
- ② 研究者 2 名で探りながら入浴介助を実践。
- ③ 特に不穏な状態が見られることが多い夜勤帯でユマニチュードを実践。実践前後で、A 様の表情(笑顔・怒り・無表情・泣く・寝ているの 5 種類で評価)、食事量を集計。
取組み期間:平成 30 年 8 月 10 日～8 月 23 日
- ④ ユマニチュードを実践した職員へのヒアリング調査。
- ⑤ ユマニチュードの理解を深めてもらう為、具体的な実践方法の研修。

【結果・考察】

- ① 日中の状態と、睡眠・食事量・疲れの関連性は見られず。
- ② 今まで介助が困難だった状況の情報を元に、探り探りゆっくりと時間をかけて介助すると、笑顔で入浴できた。これをきっかけに、里で研修をしているユマニチュードを用いてケアを行えば、A 様のケアも行いやすくなるのではないかと考えた。
- ③ ユマニチュードを用いたケアでは笑顔が 4 倍に増えた。食事量も 3～4 割アップした。
- ④ ユマニチュードを実践した職員からの感想。「毎回ではないが、表情が穏やかになり、結果として援助が行いやすくなった。」「“ありがとう”という言葉が増えた。」
- ⑤ 研修後、「正面から近付くとうまくいった。」「相手に触れる時、手ではなく上腕から触れる等、正しい知識を身に付けることができて良かった。」との感想があった。

睡眠・食事・疲れについて仮説を立て、検証した。しかし、結果的には A 様の場合関連性がないことが分かったことで、介助のやり方に着目していった。A 様に関わる周りの職員がユマニチュードの正しい知識を持ち実践することで、A 様に職員の想いが届いたのではないかと考えた。当初は相手に原因を探していたが、どれも当てはまらなかった。もちろん仮説を立て検証することは有効である。しかし、原点に戻って自らを振り返り、ケアそのものを見直すことも大切なのではないだろうか。

第 19 回東日本事例発表研修会にご協力いただいた企業

(協賛金協力企業)



(広告協力企業)

太陽生命保険株式会社

株式会社富士データシステム

CARE KARTE
ケアカルテ

多言語対応
ふりがな・英語・ベトナム語・インドネシア語に対応。日本語の勉強もできる仕組みです。

IoT 連携
ナースコールや見守り支援システムと連携可能。「質の高いケア」に必要なのは、まず状態を把握すること。連携した機器のデータを一覧で見ることでご利用者様の状態を細かく正確に把握できます。

いつでもどこでも誰でも使える記録システム



FUJI DATA SYSTEM

株式会社富士データシステム

静岡本社

〒422-8067 静岡県静岡市駿河区南町 18-1 サウスポット静岡 15F
TEL : 054-202-0300 FAX : 054-202-0277 URL : www.flds.co.jp

東京支店

福岡支店

沖縄支店

札幌営業所

岐阜羽島営業所



保険で、 認知症を 予防!?

人生100歳時代を、
ずっと元気に生きていくため。
保険にはもつとできることがあると、
太陽生命は考えます。
たとえば認知症保険も、治療だけでなく
予防のためにも使えるよう進化します。
太陽生命の「ひまわり認知症予防保険」なら、
加入1年後から2年ごとに
予防給付金を受け取れるので、
軽度認知障害発症リスクの検査や
様々な認知症予防のために活用できます。
変化し続ける時代のニーズに、
太陽生命は保険でお応えしていきます。

業界初

ひまわり認知症 **予防** 保険

※当広告では選択緩和型認知症診断保険に生存給付金特別を付加したプランを「ひまわり認知症予防保険」としてご案内しています。状態継続日数の要件がなく、所定の認知症と診断された時に保険金を主契約でも支払いする生命保険は業界初です。(2018年7月現在、当社調べ)

【資料のご請求は】 太陽生命お客様サービスセンター
営業時間: 月～金 9時～18時 / 土・日 9時～17時 ※祝日・年末年始(12/30～1/4)は休業します

0120-04-22-33 (通話無料)

<https://www.taiyo-seimei.co.jp/>

太陽生命 検索

T&D
T&Dグループ